

道ひとすじに | 若き日の吉岡弥生

1970
作品ナンバー0094

文部省選定 第25回東京都教育映画コンクール奨励賞 第10回富士フィルム映画技術賞

女性には何の権利も与えられなかった明治時代に、1人の女性として男性に伍して女医への道を開いた吉岡弥生の感動の伝記を映像化した。近代女性史の上からも興味深い作品である。



静岡県下の漢方医の娘として生まれた鷺山弥生は、明治22年医師になることを決意して上京し、済生学舎の門を叩いた。当時女子医学生生の入学を認めていたのはここだけだったが、男女の差別は厳しく、大勢の男子学生の中でわずかな数の女子学生は小さくなっていなければならなかった。弥生は努力して女医の資格を得て、本郷に鷺山医院を開いたが、開業のかたわらドイツ留学を志して、ドイツ語を勉強するため至誠学院に通った。学院長は若き日の吉岡荒太だった。2人は弥生の父の反対を押し切って結婚した。弥生の学んだ済生学舎は風紀問題で新聞に叩かれ、風紀が乱れるという理由で遂に女子を締め出してしまった。

そこで弥生は、女性だけで学べる学校を作ろうと、明治33年、日本で初めての「東京女医学校」を創立した。しかし、実験ひとつ満足にできない貧乏学校だった。弥生は自分の長男の分婉も教材として生徒たちに見せるほど勇敢だった。時代の風潮は女性も職業に就く者がふえるようになり、ようやく女医学校も軌道に乗った。しかし、学制が変わって専門学校として認可されなければ卒業しても医者になる道が閉ざされてしまうことになった。弥生は認可を得るために文部省に日参した。自分を信じて集まってきている300人の生徒のために必死だった。だが、文部省の役人はなかなか視察にきてはくれない。その文部省も遂に弥生の熱意に折れて、役人たちが学校と寄宿舎に乗りこんできた。こうして明治45年に、東京女子医学専門学校（のちの東京女子医科大学）が誕生した。

劇
35ミリ
白黒/55分

■企画
至誠会

スタッフ

■製作
村山英治
村山和雄
■脚本
谷 健二
■演出
金子精吾
■撮影
村山和雄
■照明
沢田 実
■美術
飯田公夫
■編集
沼崎梅子
■音楽
浜坂福夫

■出演

吉岡弥生：高野通子
夫・荒太：大塚国夫
弥生の父：森 幹太
校長：和沢昌二
女医学生：箕輪律子
井波いくよ
役人： 富田浩太郎
ばあや： 田中筆子
高利貸： 吉沢久嘉
他